

日本文化科目の工夫と課題

—「日本文化へのいざない」「地域実見—岐阜を知る」—

Ingenuity and issues of Japanese Culture Classes:
“Easy Steps to Japanese Culture”, “Local Field Study—Discover Gifu”

土 谷 桃 子

要旨：

本稿は、2023年度秋学期に筆者が初めて担当した日本文化科目「日本文化へのいざない」と「地域実見—岐阜を知る」の授業報告である。前者は、受講者の日本語レベルに幅あることに苦慮しつつ、主として既存の日本文化ワークショップを活用して行った。後者は、岐阜地域ならではの文化を、事前講義と現地を訪問しての実体験を組み合わせたもので、日本語中上級レベルの学習者を対象としたものである。今後の課題も付記する。

1. 日本語・日本文化教育センターの日本文化科目

岐阜大学日本語・日本文化教育センター（以下日文センター）は、ゼロ初級から中上級レベルまでの日本語クラスを実施している。それらと並行して、日本文化科目も数科目提供している。日本文化科目は、主として日文センター所属学生（日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）¹および日本社会文化プログラム履修生（以下社会文化）²）を対象としたものである。

日研生は、文部科学省奨学金を受給する1979年創設の国費留学生制度のひとつである。本学では、2001年度から日研生を受け入れている。大使館推薦・大学推薦の国費留学生に加えて、学術交流協定校との学生交換枠内での私費留学生も日研生として受け入れていることが本学の特徴である。日本語レベルは、日本語能力試験N2相当以上を求めている。

社会文化は、学術交流協定校から受け入れる交換留学生のうち、日文センターが受け入れ部局となった学生を対象とするプログラムである。日本語レベルは問わず、半年または1年の留学で日本語と日本文化を集中的に学びたい学生を想定している。日本語レベルは、初級から日研生と同等の中上級までの学生が混在している。

本稿で取り上げる日本文化の2科目（日本文化へのいざない、地域実見—岐阜を知る）は、担当教員の退職等により2023年度秋学期より筆者が担当となった科目である。「日本文化へのいざない」は通年科目（春・秋学期、または秋・春学期）³、「地域実見」は単学期（秋学期）の科目である。受講者の日本語レベルがさまざまであったり、大学外・教室外での活動を織り込む必要があったり、日本文化科目ならではの工夫が必要であった⁴。以下、各科目について2023年度秋学期の概要、実施内容、工夫、課題等について記す。

2. 日本文化へのいざない

「日本文化へのいざない」（以下「いざない」）は、2022年度までは学外講師を迎えて茶道を学ぶ春学期開講科目で、受講対象者は社会文化のみであった。2023年度に担当教員（学外講師から筆者へ）と受講対象者（社会文化に日研究生を加える）が変更された。2023年度春学期は試行期間とし、日研究生のコース開始の秋学期から筆者が本格的に担当した。概要等は以下の通りである。

表1 「日本文化へのいざない」 概要・授業内容

概要（シラバスより）	
日本文化を、実際の体験と講義を通して学ぶ科目である。取り上げる内容は、能楽（能・狂言）、雅楽、茶道、郡上踊り（岐阜県郡上市に伝わる風流踊り、ユネスコ無形遺産）等である。その文化が育まれた背景や自国の類似の文化事象との比較等について考察を深める。	
受講対象者	日研究生（6名）・社会文化（9名）
開講学期	秋学期および春学期（通年科目）
授業内容（秋学期）	① 日本について（講義） ② 岐阜県について（講義） ③ 日本の伝統的な文化・平安時代・十二単とは（事前講義） ④ 十二単ワークショップ ⑤ 平安時代・雅楽とは・『源氏物語』とは（事前講義） ⑥ 雅楽ワークショップ ⑦ 郡上市・郡上踊り・ユネスコ無形文化遺産とは（事前講義） ⑧ 郡上踊り講座（学外研修）
授業内容（春学期） （2024年度春学期予定） ⁵	⑨ 郡上市・郡上踊りとは（事前講義） ⑩ 郡上踊りワークショップ ⑪ 茶道講座（講義及び体験） ⑫ 能楽（能・狂言）とは（事前講義） ⑬ 能楽（能・狂言）ワークショップ ⑭ 社会文化修了レポート指導 ⑮ 社会文化修了レポート指導

授業内容について順を追って説明する。10月留学開始の学生が大半であったため、最初に①日本、②岐阜についての講義を行った（丸数字は表1に対応）。①では、日本の地理、季節、年中行事を紹介し、火山が多く地震が頻発すること、緊急地震速報や非常用備品の話題も提供した。②では、岐阜県統計課が公開している「統計からみた岐阜県全体の現状」⁶からスライドを取捨選択して活用し、岐阜県の地理、人口、文化、名産品等を取り上げた。

表1③以降が、日本文化に焦点を当てた内容となる。筆者は後述の「地域実見—岐阜を知る」も2023年度秋学期から新規担当で、両科目をゼロから構築するのは困難であったため、従来から実施している日文センターの「日本文化ワークショップ」⁷を最大限生かすことにした。2023年度と同ワークショップは、郡上踊り（5月）、能楽（能・狂言）（7月）、十二単（11月）、雅楽（12月）を開催したが、このうち、秋学期の④十二単と⑥雅楽をいざないに織り込んだ。それぞれについて③⑤事前講義を行い、ワークショップ後にはレポート提出を課した。学外研修としては、

日文センターが長らく親密な関係を結んでいる岐阜県郡上市を訪問し、⑧郡上踊り講座を行った。この講座についても、⑦事前講義を実施し、終了後にレポートを提出させた。

次に、上記の内容を行うに当たっての工夫と困難について述べる。最も懸念されたのは、受講者の日本語レベルのばらつきであった。日本語が全くゼロの学生はいなかったものの、初級レベルからN2相当以上までの学生が同一の授業を受ける。①初回講義は、文字での情報提供についてこれない学生が複数いたため、②岐阜についての講義では、前述の岐阜県統計局のスライドを用い、文字より図で情報を得られるようにした。スライド視聴前に岐阜についてのクイズ（「岐阜県の人口は、全国で何位でしょうか」「岐阜県の生産物のうち、全国シェアが1位のものは何でしょうか」等）の答えを推測させてから、スライドを見せた。白川郷や飛騨牛といった学生たちの知っている話題も多く、自身がすでに訪問した場所について話がはずんだり、全国1位の喫茶店支出を誇る岐阜市のトピックでは、大学近くにくくつもある喫茶店に目を輝かせたりしていた。初級レベル学生には難しい漢字にルビを振る、辞書を貸し出す、適宜英語で説明するといった配慮もした。

実体験を伴うワークショップが好評であることは、過去の経験から確信していた。④十二単ワークショップは、学外の着付け講師に十二単の着付けを依頼した。着付けモデルは、日研生から選び、着付けを進める中で衣装の色や着付けの手さばきについて教員が随時説明した。③事前講義では、来日間もない学生が多いタイミングだったため、まず日本のいわゆる伝統文化を紹介した後、日本の歴史（主に平安時代）と和服に話題を広げて講義を行った。⑥雅楽ワークショップは、雅楽の普及活動を行っている団体に依頼した。内容は、雅楽の鑑賞、雅楽楽器の伝来と紹介、衣装の着付けと楽器の体験であった。⑤事前講義では、前月の十二単ワークショップで平安時代について学習済であったため、その復習と『源氏物語』の紹介をした。

それぞれのワークショップを、ただ「楽しかった」で終わらせないために、興味深かったこと、初めて知ったこと、さらに知りたいことについて、各自の日本語レベルで事後レポートを出させた。レポート提出前に日本人学生チューター（国際交流ラウンジチューター）⁸に必ず日本語チェックしてもらうことも必須とした。

苦心したのは③⑤の事前講義である。日本の歴史について、日研生は別科目（日本文学概論）⁹で学ぶが、社会文化はほぼ知識がなく、「平安時代」という語を聞いたことがない、または聞いたことはあるが知識はない学生がほとんどである。①②の反省から、学生に身近なことから取り上げようと、いわゆる日本の伝統文化（能楽、茶道、相撲等）を紹介してから、着物に話を移し、平安時代の十二単につなげた。また、2023年度秋学期は、たまたま両ワークショップとも平安時代の内容であったため、③と⑤の毛色をどう変えるかにも頭を悩ませた。⑤であまり詳しく雅楽楽器の紹介をしてしまうとワークショップ当日の驚きと楽しさが減ってしまう。そこで、平安時代の復習、雅楽の概要説明の後、苦し紛れではあったが『源氏物語』を取り上げた。『源氏物語』はただのプレイボーイの色恋話と捉えられがちだが、それだけではないという話をしたところ、それが興味深かったと事後レポートに書いてきた学生がいた。

学外活動は、⑧郡上踊り講座を郡上市にて行った。午前は座学で郡上市在住の講師から郡上踊りの歴史と歌詞を学び、午後は現地の郡上踊りのお囃子グループの協力を得て、楽器体験と踊りの実習を行った。郡上踊りは、岐阜県郡上市で行われる日本最大・最長の盆踊りと称される民族芸能である。約400年の歴史を有し、2022年にユネスコ無形文化遺産に認定された日本の風流踊

りのひとつである。⑦事前講義では、郡上市・郡上踊りに加えて、ユネスコ無形文化遺産について話した。岐阜県内では、郡上踊りを含む風流踊り以外にも、本美濃紙の手すき技術や高山祭等の屋台行事がユネスコ無形文化遺産に認定されている。事前講義の内容が講座当日午前の内容と重ならないように留意した。

郡上での学外活動は、日研究生・社会文化全員揃って出かけるという遠足的な楽しさに満ちたものではあったが、午前の講義については改善の余地が多くある。日文センターは従来から郡上市との関係が深く、日研究生や社会文化がたびたび訪問しているが¹⁰、それらは同市における観光振興（観光課）や人材育成（人事課）の事業に協力するという形であり、今回のような純粋な教育目的の講義は初めてであった。日本の歴史の知識が乏しく、文語や方言の混じる郡上踊りの歌詞の内容を類推する日本語力もない学生にとっては、講義は非常に難しいものとなってしまった。視覚資料の活用がなかったことも悔やまれる。次回以降同様の内容を行うのであれば、より平易な内容に絞る、事前講義で扱う部分と当日講義で取り上げる部分を切り分けて段階を踏めるようにする、現地講義担当者との事前打合せを綿密に行う、日本語力のある学生のみを対象とするといった改善策を講じる必要があると痛感した。午後の郡上踊りの楽器と踊りの体験は好評で、春学期まで留学を続ける学生は、ぜひ本場の郡上踊りに参加したいと口々に言っていた。

2023年度秋学期の「いざない」では、日本語力にばらつきがあり、かつ日本の歴史について基本的な知識のない学生たちにどう教えるか、内容に興味を持たせるかにはどうしたらいいか、苦慮し続けた。実演や実体験の魅力をより強めるような、そしてただ表面的に楽しいだけではない学びを与えられるような工夫をさらに重ねなければならない。

2024年度春学期の予定に言及しておく。筆者は、春学期は⑨～⑬の事前講義＋ワークショップを担当する。⑩郡上踊りワークショップでは、浴衣を着用し、郡上踊りを学ぶ。着付け、踊り指導とも県内から講師を招く。⑨事前講義では、日本のお盆・盆踊り、郡上踊りの歴史等を取り上げる予定だが、秋学期の⑦⑧との重複をどうするかは要検討である。郡上踊りの実際を楽しむ⑨⑩を行ってから、⑦⑧のような講義形式で深く学ぶほうが順序として適切かもしれない。⑪は、茶道指導の経験がある本学教員に依頼する。⑬能楽（能・狂言）ワークショップは、観世流シテ方と大蔵流狂言方の現役能楽師を招聘し、能・狂言の鑑賞、能楽の歴史、能と狂言の違い（所作と面）、能楽の楽器、能楽の衣装といった内容が含まれる。⑫事前講義では、日本の歴史の概要、日本の演劇の紹介、能と狂言の主な違いを取り上げるつもりである。

「いざない」に関して、授業内容や方法と別に今後大きな懸念事項となるのは、予算削減が続く中での費用負担である。外部講師によるワークショップや学外活動にかかる費用を今後も負担し続けられるかは不透明である。また、半年のみ在籍する社会文化に対する成績・単位の問題もある。「いざない」は通年授業であるため、現状では半年のみ在籍の社会文化には成績も単位も出ないが、今後もこのままで良いかどうか、再検討が必要になるかもしれない。

3. 地域実見—岐阜を知る

2022年度末に担当教員が定年退職したため、筆者が引き継いだ科目である。「地域実見」（以下「実見」）という科目名に謳われているように、岐阜県内各地を実際に訪れて学ぶ科目である。2023年度秋学期に訪問した5ヶ所は以下の通りである。下表の丸数字は訪問場所と内容を示すも

ので、授業回数を示すものではない。

表2 「地域実見」概要・授業内容

概要（シラバスより）	
岐阜地域は日本列島の中央に位置して穏やかな気候に恵まれ、特色ある文化をはぐくんで、それを現在に受け継いでいる（日本遺産第1号にも認定される）。この授業では、岐阜地域の歴史や文化について講義を聞くのみならず、史跡・博物館等を実際に訪問することにより、体験的に地域認識を深める。	
受講対象者	日研生（6名）
開講学期	秋学期
授業内容（秋学期）	① 岐阜市歴史博物館（三英傑と岐阜・岐阜の歴史） ② 地歌舞伎公演（岐阜の地芝居（地歌舞伎） ¹¹ ） ③ 岐阜県防災センター（日本・岐阜の災害と防災） ④ うかい歩き（岐阜と鶺鴒） ⑤ イチゴ農園（岐阜市の農業・岐阜のイチゴ）

岐阜の歴史・文化、そして岐阜の今を知ってほしいと考えて選んだ訪問地①～⑤である。

① 岐阜市歴史博物館

織田信長や関ヶ原の合戦は、岐阜の歴史や観光において外せないポイントである。2023年度は、タイミングよく岐阜市歴史博物館¹²で10月7日から11月19日まで特別展「天下統一 信長・秀吉・家康と岐阜」が開催されていたため、それに合わせて事前講義と博物館訪問を行った。日研生は、他の留学生に比べれば日本に関する知識があるが、三英傑（信長・秀吉・家康）の名前は聞いたことがあるという程度で、事前講義では基本的なことから説明する必要があるがあった。博物館見学当日の反省としては、充実した展示品に留学生がついていけなかったことがある。注目すべき展示品を筆者があらかじめピックアップしておき、それらについて説明を加えながら見せないと、視線がただ展示品の上を滑ってしまう。事前講義のみならず、当日も展示品の丁寧な見せ方を工夫しなければならないと猛省した。

この三英傑の特別展は博物館の1階で行われ、2階の総合展示室には岐阜の歴史を古代から現代まで示す常設展示がある。日研生は2階も見学し、別科目（日本文学概論）で学んだ日本の歴史を復習することができた。

岐阜市歴史博物館は、総合展示室のリニューアルが計画されている（2025年度施工、2026年度リニューアルオープン予定）。市民に加えて観光客の来館も想定した、信長や戦国時代を強化した展示になると聞いている。より充実した展示を期待している。

② 地歌舞伎公演

岐阜地域は、地域の人々（素人）が演じる地芝居（地歌舞伎）が多く残る地である。このユニークな岐阜の文化を取り上げた。2023年度は「清流の国ぎふ 地歌舞伎勢揃い公演（「清流の国ぎふ」文化祭2024さきがけプログラム）」¹³が行われていた。このプログラムは、県内各地に散在する歌舞伎保存団体が、岐阜市のぎふ清流文化プラザ¹⁴で順次公演するものであった。そのうち、11月12日の高雄歌舞伎・気良歌舞伎（いずれも郡上市の保存団体）の公演を観劇した。事前講義で日本の演劇の歴史、特に歌舞伎（大歌舞伎と地歌舞伎）を詳しく説明した。歌舞伎についての学生

の知識は、顔にすごい化粧をして古い日本語を使うという程度だったため、基本事項から説明し、公演演目（弁天娘女男白浪・稲瀬川勢揃いの場、奥州安達ヶ原・三段目袖萩祭文、菅原伝授手習鑑・寺子屋）の概要も紹介した。演目の事前知識がないと理解できないというのは、留学生に限らない。観劇後、芝居の言葉が理解できなかったという感想はやはりあったが、事前にストーリーが分かっていたことや、当日イヤホンガイドがあったことで、ある程度の理解はできたようである。

③ 岐阜県防災センター

従来全学で行われていた留学生対象の防災訓練が、コロナ禍を経てなくなったため、地震大国日本でどのように防災を心がけるべきかを取り上げなければと考えて選んだ訪問場所である。事前講義では、地震の起きるメカニズム、過去の日本の大地震（1891年の濃尾地震について特に詳しく）、地震発生時の行動、防災の心がけについて話した。一度も地震に遭遇したことのない学生もあり、講義だけではいまひとつの反応であった。しかし、防災センターで地震体験、煙室避難体験をし、防災用品の数々を見ることで、我がこととして感じるできるようになった。2024年1月1日の能登半島地震では、岐阜も震度4の揺れを観測したが、その時岐阜にいた日研生から、防災センターで地震のことを勉強していたからパニックにならずに済んだと聞いた。防災は、日研生に限らず大学全体として学ぶ機会を再度設ける必要があるだろう。河川が多く水害災害に見舞われることの多い岐阜の災害の特徴も取り上げる必要を感じている。

④ うかい歩き

岐阜の観光の目玉のひとつに、長良川鵜飼がある。長良川鵜飼の実施期間は、毎年5月11日から10月17日であるため、10月留学開始の日研生を連れていくには日程的に厳しく、また最も安価な乗合船でも1名3,500円という費用のハードルも高い。そこで、鵜飼が行われない期間も長良川うかいミュージアム¹⁵で毎月第2日曜日に開催している「うかい歩き」に参加することにした。「うかい歩き」では、ボランティアガイドとともに鵜匠の家や鵜飼に縁のある地域を回り、ミュージアムの展示の説明もしてもらえる。学生たちは積極的にガイドに質問をしながら歩き、ぜひ春には鵜飼を見に来たいという気持ちを高めていた。事前講義では、鵜飼の歴史や文化的な価値について説明した。岐阜市は、鵜飼のユネスコ無形文化遺産登録を目指しているが、そのためにどのような強みと弱点があるかを事後レポートとして考えさせた。

⑤ イチゴ農園

岐阜における産業を何か取り上げたいと考えていたところ、偶然本学応用生物科学部卒業生が市内でイチゴ農園を営んでいることを知り、協力を依頼したところ快諾を得た。事前講義も担当してもらい、岐阜地域における農業、新規就農者へのサポート、岐阜ブランドのイチゴ、イチゴの生態など、現職者ならではの話を聞くことができた。農園訪問では、イチゴ狩りを楽しみながら、イチゴの味や香りが品種によって異なることや、都市部における農業における工夫、自国おイチゴや農業との比較などを学び、考えた。

「地域実見」に、岐阜の歴史・文化と岐阜の今の両方を盛り込みたいという意図は、ある程度

達することができたと考えている。一方で、限られた回数で両方を扱おうとしたため、焦点がぼやけた感もある。訪問場所を1、2ヶ所増やすことも考えたい。

本科目で最も苦勞し時間がかかったのは、訪問場所の選定と訪問の段取り手続きである。訪問候補地探索は現在も継続中である¹⁶。訪問地決定後は、現地の関係者との折衝、交通手段の確保手続き等が必要で、教室で行う通常授業とは異なる煩雑さがある。

現在は、日本語力の高い日研生だけを対象として本科目を提供しているが、今後は、より多くの本学留学生に岐阜地域の文化を学ぶ機会を提供する必要があるかもしれない。地域自治体や組織の力を借りながら、長い目で将来を見据える必要がある。

4. 今後の課題

「いざない」「実見」の両科目の今後の課題（授業内容以外）を列举して本稿を終える。

① 異なる日本語レベル

当然のことながら、日本語レベルが中上級で揃っている日研生のみが対象の「実見」のほうが、初級から中上級までのさまざまな日本語力の学生が受講する「いざない」よりやりやすいし、内容を深めることもできる。しかし、日本文化を学ぶ門戸を広く開く意味は大きい。提示資料や補助的な言語使用を工夫しながら、初級レベルの学生には分かりやすく、同時に日本語力が高い学生も満足できるような授業をするにはどうしたらよいか。次回以降も試行錯誤を重ねる。

② 受講対象者の拡大

本学の日本語研修コース（大学院生、研究生、交換留学生が受講できるコース）¹⁷では、近年、ゼロ初級から初級レベルの日本語を週に数コマ（1コマ＝90分）のみ学ぶクラスの希望者が増えている。以前は、専門研究に入る前にまず日本語を集中的に学んでいたのだが、最近は、専門研究は英語で行うので日本語は研究の合間に少しだけと考える学生が増えているようである。しかし、日本語はあまり学ばない学生も、日本文化に対する興味はある。日文センターの日本文化ワークショップは、全学の学生に機会を与えるものであるが、回数が限られている。「いざない」や「実見」のような科目や機会を、幅広く提供する必要があるかもしれない。また、近年重要性がますます増している多文化間共修（国際共修）の中に日本文化・地域文化の学びを位置づけることも可能であり、魅力的である。

③ 費用

上記2.で述べたが、講師への謝金、学外活動費用の捻出が年々厳しくなっている。日文センター予算以外からの支出の可能性を探ったり、費用のかからない内容に切り替えたりしていかなければならない。前項②で述べたような、全学の留学生を対象とするものであれば、日文センター単独予算以外からの経費補完を得られる可能性が高まるだろう。

注

1 日本語・日本文化研修コース：<https://www.global.gifu-u.ac.jp/center/education/jlcourse/>

- 2 日本社会文化プログラム：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/center/education/jscprogram/>
- 3 「日本文化へのいざない」を履修する社会文化は、学生によって留学開始が春または秋学期となるため、どちらの学期からでも始められるようにしている。本稿では2023年度秋学期について述べる。
- 4 この2科目に加えて、筆者は日研生対象の「日本文学概論」（日研生対象）も担当した。同科目概要：文学には、その国の歴史や思想が自ずから現れる。この授業では、まず文学を支える文字についての考察をし、その後、時代に即して貴族の文学・武士の文学・町人の文学を概観し、それぞれの特徴や代表的な作品について学ぶ。学期後半には近現代小説を取り上げ、その読解を通して日本語力と鑑賞力を磨く。
- 5 2024年度春学期の授業内容は、本稿執筆時はまだ確定していない。⑨～⑬は筆者が担当し、⑭⑮は社会文化担当教員による指導となる予定である。
- 6 岐阜県統計課「統計からみた岐阜県・市町村の現状」概要版：<https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/371430.pdf>、詳細版：<https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/371432.pdf>
- 7 日文センター日本文化ワークショップ：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/center/events/workshops/>
- 8 日文センター日本人学生チューター：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/center/about/tutors/index.html>
- 9 注4参照。
- 10 日文センター地域貢献活動：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/center/education/jlscourse/community/>
- 11 「地歌舞伎」は、素人による歌舞伎を指す、岐阜で使用されている名称である。一般には「地芝居」（ただしこの場合は、歌舞伎以外の芝居も含む）を用いる。
- 12 岐阜市歴史博物館：<https://www.rekihaku.gifu.gifu.jp/>
- 13 清流の国ぎふ 地歌舞伎勢ぞろい公演：<https://seiryu-plaza.jp/site/jikabuki/>
- 14 ぎふ清流文化プラザ：<https://seiryu-plaza.jp/>
- 15 長良川うかいミュージアム：<https://www.ukaimuseum.jp/>
- 16 2023年度秋学期訪問地以外に以下の県内各地を下見した（順不同）。奥の細道むすびの地記念館（<http://www.basho-ogaki.jp/>）、内藤記念くすり博物館（<https://www.eisai.co.jp/museum/information/index.html>）、岐阜かかみがはら航空宇宙博物館（<http://www.sorahaku.net/>）、岐阜関ヶ原古戦場記念館（<https://sekigahara.pref.gifu.lg.jp/>）、海津市歴史民俗資料館（<https://www.city.kaizu.lg.jp/kurashi/0000000791.html>）、岐阜県庁（<https://www.pref.gifu.lg.jp/page/288826.html>）、岐阜市リサイクルセンター（<https://www.city.gifu.lg.jp/kurashi/gomi/1002344/1015758.html>）、根尾谷断層観察館（<https://www.city.motosu.lg.jp/0000001399.html>）、中山道鵜沼宿（<https://www.city.kakamigahara.lg.jp/kankobunka/1010039/unuma/index.html>）、中山道太田宿（例：中山道会館太田宿、<https://kaikan.ootajuku.net/>）。
- 17 日本語研修コース：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/center/education/jlcourses/>

参考文献

- 膽吹覚（2020）「報告：シンポジウム「地域文化を活用した留学生教育」」『福井大学国際教育交流研究』4、pp.31-38
- 内丸裕佳子（2013）「中級後半および上級前半の学習者を対象とした地域文化・産業を学ぶ日本語教育の試み」『岡山大学教師教育開発センター紀要』3 別冊、pp.117-124
- 正路真一（2021）「外国人留学生による三重地域文化発信 ―国際交流センター科目「日本事情Ⅰ」における Virtual Exchange の取組み―」『三重大学国際交流センター紀要』16、pp. 119-132
- 高橋千代枝（2022）「地域資源をリソースとして活用した留学生向け日本語教材の開発と実践についての一考察 ―2021年弘前大学サマープログラム日本語コースの事例―」『弘前大学国語国文学』43、1-28
- 平田未季（2016）「地域住民と留学生の協働による地域文化保存の試み」『秋田大学国際交流センター紀要』5、pp. 25-42